葬乃夜話

風雨雷霆八雲水流きるがごとし
吹き中ふ雨ふるがごとく師の信者又ちうり師喜
喜好めて弟子共善ゆるがごとく
弟子又ふるがごとく機かるがごとし師ふるの
師雨岡菴の大人を甘性温厚まことを恒ふ裕
喜好をもつて夫裕八天理の学文して人事の

東京都立中央図書館蔵書

徳則くとの如く一日も廢せず人々の次第に以て吾家の
風雅を振ふ又文墨の式を立てけるとて式也
祖翁の式を知れなるを古老先達の人々諸々の
是を伝承し居んとの心ばへ遠境狂雅の輩
皆々学ぶ所なるべし扨平の式を
静学の師の詠まれし式を増間書
師と仰ぎ志を尋ぬる人々祈り答へ給ふ因

て一小冊を編み中巻を秘伝として文を
清付き式を武蔵然るべしてはかんと式はこの如く
問ハ出雲ハ天学ひつゝ廣し識ハ門人の正路
堂に乗留ハ階梯彩るべきやかく切者明の玄
球徒丹青魚の極ならんと思おもをおの禮
一時の力を尽ハせども是を按正し仕ほそく
徐風葬師と考訂をを学ぶ満本を毛孔

[illegible]

師法の流行豊郷して命を伝るより遠

[illegible]

[illegible]月の[illegible]の日

太陽

[illegible]

葬式之話

式正文墓會式事

○和式乃法會みな。三神の尊像を掛ひらくの式あり。

[illegible]など。[illegible]吾家の式なるべ。　祖翁乃尊像又を三頭の

圖なぞ其付の[illegible]。若し真の卓又を八脚卓

などを用ひ。燈明點じ香を捧。巻物なるべ

但追善の時。[illegible]住職[illegible]。又其人の筆ち法華経[illegible]

安机左右燈花香炉。奠物を清潔を[illegible]

○正面祇陳。上座宗通。其右文甚筆跡筆ゑてゐゐべし
○右上座ハ。貴人武家方古老の輩たるべし
○右上座ハ。僧衆遠来ゑゑあきらべし
○其日の役者。其所の社中へ。まを序たるべし
○尊像の正面をゑ鶴彫してるべし
○出席者礼服。僧侶ハ法衣俗人ハ麻上下なる事
○序中無言禁煙ゑなり。但時宜ゑかり宗通許すとあり
○其日乃役者　執筆　日副　坐配　書記
一法ゑ中ゑとゑとあり。神像の時ゑ式ゑ　導師より。宗通に

あいさつして宗通を別間ゑ請し。一座。徳寺ゑ休息す。
其時あゑし神像を迎ゑさ始。無面掛ゑて湯漬ゑ初す
なゑと。ゑ事畢て再ひ座ゑ着し時。宗通安座ゑ来たると
等しゆるすなり

宗通心得ゑ事

○一順すむまてハ別間たるべし。百員に百人ゑ付ち表ゑ列
ゑるふすべし。扨一順すゑなゑ坐配ゑ命して各序ゑ着し
むべし。既ゑ着序ゑ云ゑ。移ゑ威儀を整へ序ゑすむべ

未序まで跪て座中へ此旨の挨拶し。進んで尊像に向ひ恭く
礼拝し。神仏をいのり祷を寛々してぞゆるくと座を立べし
○執筆よりあげ手ちがで。なだやかく一句なべし。宗匠はけ句
なきうちに人を用捨して付けざるなり事
○句なおなりとて。ちがく付句なべし。席を座すべし
○匹すると両三度よりなば。句句を付て連歌所へ出べし
○人の影句を奪ておのれが句となすべからず
○句の出しるるべし。おのれが句ハ句場連衆の吟味
調るを待て次宗匠に於を申

○句評ハ先哲の句を賞じ。己がぬし所をさとみて。作者のい
を考へべし。一字も三字まで板摺のたびあんも紙巻べし
○去嫌を除ると己が任にて。急ぎすべし

執筆心得所事

○発句ハ初句より用意し。本懐を下に置。下懐所を上に置。
中上に発句紙のせて文墨を携へ。宗匠に随て出べし
○宗匠一座へ会いさつある時。己ハ跪居をつきて行。宗匠進で
座てすむべし。宗匠尊像を拝ある時。己ハ尊像の前紙

鞠躬して出るなり。静なる処にて出るの結なるべし。本懐の
をたる男。下懐をたる男。宗匠命あるべ。一順清々あるべし
○始終無解急句なり。句数吟すべし。完全なる付句仕様
こそ。折々おうなるべし。二句釜すべし。一座の近速ハ独芳の悪
なるとあれハ調子を矢うべ。まづ付ぬ事を心得べし
○月花の座を忘れまじ。近べし。苔のお越ハ大句なるひ月ハ
月お越と呼べ。敷事部の連ゝと連ざゝをまつし。又
事一順を出べし。又百負ハ出なゝハ毎八句目にて月姿と
呼べ。連中完結して枝葉のなを付ふべ。いづれもさうやう

なるべ。
○俳諸句と云べ。さうやうふ句を吟すべ。敷付句おかゞ
掛合を吟味して宗匠へ句べ。宗匠よりとあゝで書
ざゝ先ゝなるを吟して付ることを一座まつし。その后下
懐句まつして句なると付句と二句を吟すべ。それより句の
句を本懐句ゝ写べ。又さ合ありて付る所さハ句を
吟ずべ。是付句を返すことをまつしもるこ
○さ合付揚と己ゝ職こ。路ゝ俳諸すべ
○揚句又執筆ゝ修こ句なるとべ

○中須執筆の副代らんとして文墨の者は跪一礼をなし
て答礼し退て席をはらべし裏一順よむて又代るべし
○満巻の上吟声の次第ハ左の通紙たて左のゆ懐紙をおき。
右はしるす紙おのゝ懐紙に続て。先発句をおくるすゝ
とよまゝ。ちがへして二返目に一句ずつあげてよむべし。よゝかゝ。
上の五文字をよむて切て息をつぎ。中七文字下の文字ハ伸ばして
よむべし。よゝ終り紙いつてよひくべし。短句ハ七文字づゝ切く
よむべし。もとより句うたを名をよむべし。撥拍毎ゆゝ一句をも
やめて。句ひの若ハ二返めよりうて後て終に一句ずつあげて

吟ずべし。発句ハ句ごとに吟ずる
○吟ずるすゝて宗匠席ハ文墨紙ゆゝ一句押ゆり
ゝゝ分ゆゝく退て。文墨と己ゝ間を通すべし。ちゝゝて
懐紙文墨ゆゝ引つゞきて入座
○懐紙懐中。開目の右ゆ年号月日何亭興行と書。右ハ
開目の左ゆ書ありてと書べし。右ゆなくバ即興なゝと
書べし。如書あゝハ吟ずるの時ゆ紙ゆよりてよむべし
○真名仮名のゝゞ。日字ゆ吟ずるゆ示左ゝ抄十篇ゆあり。
熟読教味すべし　又一順の弓附句の次第すべし

○百員ハ表八句八行圭　裏十四句（八句月秋　九句め月　十三句め巻）　表十四句（十三句め月）
名おの表まて七行まて　名おの裏八句（七句め花）　八行まて（表四裏十）
○七十二候ハ百員の三折を清るる
○四十四行ハ百員乃二三の折紙清るなり
○源氏行ハ　才六句（五句め月）　ウ十二句（七句め月　十一句め巻）　二才十二句（十二句め月）
二ウ十二句（七句め月　十二句め巻）　三才十二句（十二句め月）　三ウ六句（五句め花）　行西六行まて
○六位行ハ源氏行中の一折紙清るる（二花二月の略或あり）
○長歌行ハ才八句（七句め月）　ウ十六句（十一句め月　十五句め花）　二才十六句（十五句め月）
二ウ八句（七句目巻）　行西八行まて

○短歌行　才四句　ウ八句（七句目巻）　二才八句（七句目月）
二ウ四句（三句め花）　西して行西六行

連歌心得ゐ事

○坐配の指揮よ博せて拝礼ゐ慕からん。己こゞ坐よ着べし
○尊像の正面行通るべハいつても一礼あるべし
○宗匠おゐの附あいさつあるる。黙して一礼すべし
○ほけるあぶパ〜ゐ進るをつきて居るとるべし。礼なあ
るをゆゑなどゐ礼ゐすべし。後しやうハ長句ゐ〜ハと

みな字にて切て。七字みな字よハつゞけて続すべし。結句ハさな字
にて切べし。いろはさそもろよ。当惑ハぬやうに静よわるすべし
○はけ句形ゝ。挑灯其句を後と上へし。こゝ所一礼すべし
○宗匠主しゝ渡うをありてきばるゝとあゝハ一礼して結べし
立しゝ己みなりて指者あゝハ其所又一礼すべし。此を判者のぬゝ
渡ゝとあゝバ四句ゝ不足をなへうべ
○もしはけ句ゝ。去嫌なゝどもひ出ゝ。指合ハ其ハ渡者
句ハあけてさわゝうゝと。ひろべし
○宗匠主しゝのるゝ渡者句をゝゝと甚不礼なり

○挑灯の書写畢紙ハ渡。渡者句をゝハ不礼ゝ
○挑灯月紙と呼ゝ。秋季ゝ句を生べし
○序紙立ゝなき答ゝ。ゝハぬゝ。あとて立ゝるゝゝを
移すべし。面ゝ句ゝ付句ゝ。きゝるゝハ其して立べゝび
○禁句紙句ゝまゝて渡しゝむ重し
○扇をゝげゝはゝべゝび
○ゝひ眠紙しゝのべし。ゝ身の不敬ハ其ゝ人ゝ懇意を
ゝあ渡ゝ渡ゝ渡しゝむべし
○人の句を出渡時ゝつゝして会主ゝ礼のゝゝ句

仏さて行べし〳〵

○人のさし合をなべうす

○あるうの方式我と吟すべうす

○裏一順とゐる時。熟物あるべうの方ばかりなるも一句付かば再ひ句をおすべうべん

もの仏壇のれ〳〵み礼吟たるも一句付かば再ひ句をおすべうべん

○若の句をもなべ辞退すべし。宗匠うへ人数あるもあわせと。

再ひよみべ出辞すべうべし

○満巻のうへ宗匠執筆へ一礼あいさつべし

○宗匠退出あるべし。さて座よりさしべし。むこの人今一礼

あるべし。極さて発〳〵ぬるうみいと移るまきべし

生配并書記心得方

○書記の役は。其日の出席人数をかりて。席札を調ふ。

探題の用。或は表初對面の人数姓名なと紙記すべし

○座配乃人名は。記せし席の順よりあるべし

古老の人数上るやうに心ゐべし。むかし方は位もあれば位

高人なきもて席札をうつべし。如一順源ば連中は席うつ

つし。又は茶煙草等のかけひき。うるとは助をすべし

會主心得の事

○茶日に懐紙を用ゆべし。本懐紙ハ杉原下懐紙小懐紙ハ半紙。法帖紙なべいつれにても不用べし。水引金赤なるべ
奇
き式上の。紅白なるべ。紅をよるべし。用目の名紙一すけうの用
紙縄
意べし。常の會にてゐ引なくこれをもつて用ゆ。法目
のゐる墨紙法べし
但し進善の時ハ白水引をべし
○宗匠休息の為用ゆべし。為用なくハ屏風にて隠べし

義式たちて
を納進善の
類ハ義自ず
但者〜茶を
宗べしも席
挙白も一世の
老人又ハ一家
に有ある人を
為べし

○重祝墨筆ゐを法べ〜べ〜
○茶たを等許きあ時速に指出べ〜
○抛茶裏一順ゆ宗匠の茶をすゝ茶の白を貴人
又ハ老切遠来の人抛茶を時宜を考て宗匠に形〜
色〜挙白ハ抛茶の後に出ゆ〜てよ〜
○茶ゐ白すゝ〜時。炉中釜ゆ席上の器物を引ゆべ〜
○義式すゝてハ。宗匠抛茶一世の座中へあいさつすべ〜
○饗応を一汁一菜を設けとして酒ハ三献にるべ〜ん茶炉
に沢あ〜ぬ為なわいあ〜抛茶を後すべ〜とゝ

○堂内の会衆ゑ〻おすこと。古人よりの法禁す。いとづに数を
並ぶんよりよりの法らよ。僧なくざるばかりよすべ〜
○僧座のあ〜法〜生配よ呼き。宗旨よ　そるを旨すべい。禁
祝を考へ清なく海尾すべ〜。如てなーのみとて主務
ハやのんあ〜べ。ん安〜さわい興法〜〜。あ〜〜奥る事ず
きハやの行特境よ入ぶよ〜〜〜〜法うべ〜
西あ〜かの免門部部ちといふ。復重法労を勤へべ。
他の部よあるて自の部よなきことあり。互よりて互に
見ひて。熟〜境教味〜〜己が固有の式ちすべ〜

略式文葉會の事

○座よ三順の圖或ハ宗旨方真蹟又ハ家寶弘一軸等此付文葉
ハ座よ〜〜〜依て急巻せ志かゝ〜〜
○僧座ハ法衣後へ〜ね袈裟附色よ〜〜
○一順の号宗旨別号懐弘ホ式の〜〜
○宗旨巻生のう〜孰名よ文葉をこゝおろ〜一順を呼ば
ある白ハ二度よもべ〜〜此付名をよゝあぐべ〜
○一順ハ〜〜畢て。宗旨より白ハ或ハ白たけ孰呼又ハ二白置

乱吟など。其日の時宜にかなひて吟すべし。句たけ乱吟とも。
己が句の長短をはかりて付るべし。二句置に句毎に二句毎て
付るべし。乱吟とは長短を揃へず己が句毎に付るべし
○はけるある時居あぶらをつきて清書句をうつすべし。句
清書式のごとし
○清書よりうつして吟ずの時は。発句もよみさだめ。各もよみ
ゆくべし。句のむと揚句をかへすべし二度よむべし。よみの式
のごとし。よく聞くはあり進て宗匠并執筆へあいさつあるべし。
二度目はひらく。ある又一度へ一礼あるべし。一度は乱礼あるべし。さて

執筆宗匠に窺ひ文臺硯箱をあらべし
○退出の節は宗匠執筆連座各々式のごとし
○真既正面にいつるべし。鶴影にてうつべし
○席中人数なく起居することあるとも極めてさとかづかぬ
ようすべし。略式といへども別紙に於て二ハなし
只席上の席様と。人数の多少によりて。事に無きを
切そぶきゆくのごとし
右一度の大旨八十論より出
風流雅のみ拾ふ別に夜話の節よあらとす

五條式目解

一 諸禮停止

是は風雅の功拙老幼よりして定まる乃大なる
事は世法貴賤の礼を乱さるゝかゆえに吾家の礼
法なるなり

一 小語低声

座中世事の談なれハ一生用務之低声を呼く
座ゝ連座の句要法妨なるなり

一 出合遠近

こゝ乱吟の時。両人一時に面白紙をひかけさほゝ。其句こゝ
ろ紙いつれと定めるさんよハ。其名の順をそりかゝりて。其
遠きかゝるをさきとめとなり

一 一句一直

是は付け句座ゝ一時今一句を付ゝ。二句座ゝハ他人全
座ゝてゝいやしくとすゝめとなり

一 月巻一句

此二つを風流第一乃景物なれば。月人二句をすべ
きとなり
但句順なるべし。月を二句もあるべし。句ハ変して
一句きるべし。礼吟なるべ月といへる句をば礼紙カヘ
て八事ハ句を出べし

式正探題會の事

○床飾日次。文芸ハ上巻の巻ハ中央ニ置べし
○書巻の題ハ。硯箱ヨノセテ床飾。又ハ文箱の傍ニ置べし
但結ぶ紙用ひ。並巻ハ結ばなくべし。頭の順ニ書き
乃なるべし。硯箱後あるべ。絵を床の内ニ置べし
○床飾。かざり硯あるべし
○料紙重硯ハ。次の引ニ置べし
○客お座の時。神像をおゝ。字色ニ一礼して。巻ニつくべし
○巻お座題の礼ニ。拝を立て。宗匠より立次へ

一礼して進みよる。たのみて云右のみよりて。懐中
座を辞して色々。色がなるつきゆやうまし寄てこゝ
をゝとして懐より白紙すゝめ。次いたのとたそのゝを
右のゝたを。色下をこゝろ和歌よべし

○酒宴題を云畢。宴をこゝろ。あふし懐紙のよう重ねをのゝし
持出て。上座より置べし。上座より人を下の役を己ゝ為のに。
懐紙ハ中より二枚ゝ取て次へ巳すべし

○懐紙をしのゝく折て。端をこゝろ揃て置べし
時宜よろし。此所家色より胡桃茶煙草等ゆるすこと

あるべし。許さゝなく胡坐する又礼なり。吟声のあり胡坐
ゝ有ゝ。むべし。其所あり方炯を盃ゝ引べし

○祝懐紙中巡りの終るをゝて。銘ゝ書ゝ懐紙ゝ先題
と名を記て侍ゝ置白紙すべし。懐紙ハ紙を折ゝ折ゝ
又ゝ二ゝ折ゝ。そゝめて一折ゝ二字ゝ中ゝ上げて題紙認。其下
ゝ名を書べし。発句ハ中ゝ折ゝ五字七字と出げ下の五字
ゝて其ゝ書つぎゝ上ゝあげて書へし。脇句ゝ口ゝ
○兼題当座ゝ。清書ハ短尺を用へし
○句巻己ゝ成ゝ。詠ゝ二句を書ゝ。折ゝ又合ゝて一人ゝ

宗匠ゟ被仕て加筆紙をべ。加筆ゟ出らバ一礼して退き。
己が座ゟつき。左の手をたてたゝみゟ指て通べ
○兼題ハユまをゝし彩骨をつゝすべ。当宝ハ付の間ゟを
失ハざる礼とす。つきゟ色もゝ礼ゟあゝ次。兼題当宝共ゟ
序白あゝべ。是宗匠への礼
○短尺認やゝ。三つ折てゟ題を書べ。二字三字まて
の題を一行ゟかき。四字ゟハ二行ゟ書べ。最白ハ初同の
上へ一字御て出すべ。六字七字ゟ書て長紙つゞて五字ゟ
と名をきべ

○偖一座終ハ酒ゟもを又て。筆硯宗匠ゟ賜ひ。宗匠ハ懐紙
あゝば。其紙を連帯ゟ書もべ。ゟ付未座ゟ一人てすゝ。
題をの出る祝蓋ゟ終人紙置。ゟ為て懐中ゟ出し左の
ゟ次し色ゟ右の方ゟ初宗匠ゟ座ゟ向て一礼して
退くべ。多人数の時ハ二行ゟ置べ
○満堂終ハ出船ひなゞ。筆硯ゟ宗匠ゟ向て祝蓋又墨を出
出し。不系閑堂の終ハ初も順ゟなべ。左の手紙たて左の
ゟ持て渡あゝべ。ゟ次ゟ者のゟ
○貴人宗匠の白い筆一礼してゟべ。連中ゟ又

て。ゑをつきて礼すべし。右後二返よりて二返目より各々立後へ
し。客の會には連中の方より向ひ。亭主には霊前より向てよるべし
○執事自白ハ少し小音にてよむべし
○清し終て上の方にてなるやうにおきて。再び拝者一揖拝
してもとの所へ出る。一礼より向て一礼すべし。一座答礼すべし。
者にして會をすまして。客亭執事よりあいさつ。一礼して一礼すべ。
一座答礼して客亭執事へあいさつすべ
○通題ハ執事の方より白を出すべし。功者を法のごとくす

探題略式會の事

式のなるべき會にて。うわを略しべく。執筆題をえがゝし。こ
硯箱出る人より。題をとのもとに置紙わたし。客亭よりけしめ
上座の方より次第にくみ入しめ。其蓋をまこなをとめ置く。
発人迎あはひ一時。亭主より初て重なるやうみて上座より巳。
上座の人より執事より客亭より白ひ清を上べく
いつゝ。題ゆとる時ハ客亭上座よりけしめ。発人紙置時ハ亭主
より先なりと心得べし。進退ハ余ハ式のごとし

去嫌の事

○新しき嫌ふもの

諱字　師走　陽生　のときの月

○折合ふ嫌ふもの

月と年

○ふる嫌ふもの

月と年　けやけさ

○表ふさらふもの

神祇　釈教　恋　雑　述懐　名所　国の名　口伝

○月花ふ嫌ふもの

月花の両　花花の両　名所の名　名所ひつくりかへす

白去乃事

○二白去のもの

細ふ魚　鳥ふ多　新ふ田舎　神祇ふ釈教　持物ふ刈田穀

人倫ふ　天童　天女　陸門　別所　僧　仙洞　鬼　月　遠ふ日　金の涙ふ　遠ふ　鶴の格ふ　鶴の格ふ

鶴　月　右白極ふ

桂の花ふ　桂の木　天れ

美ふ恋　遠ふ道　の義にして五智のもの

やこや　なりなる　紀よ紀　只の字

やなり紀の三字句体自ら似かよ雷ハ三句ものて可なるん哉ゝ
只の字のこ二句ものハ何のあるもやと考へ考へ年月を経ても
さらに句体変らぬ故なるべし　かるがゆゑ

○三句去

雲　風　国の名　居所　あ辺　生あ生ハ三句去　ひとり　紀字　一と二と変り
口字　極初中末と変りて可　食あ　鈴と金と変りて二句　松宮　松尊のあ　星月夜　七夕　夜ゝ
△神極　△紅葉　△山のあ　△海のあ　△以下ある字ハ句まとりてゝ可なり　用捨あるべし
○雲風ばかりアルハ雲ト雲風ト風ゝ舎ハ推テ知ベシ

○五句去

月　松　合季　口季ハ句まとりて今ゝ　用捨あるべし　名所　恋

○七句去

雪　霰のあ　千の苔の雪　多情ゝ多鳴

○一字一句のあ

あ葉　郭公　松宮　あ仏　水鶏　牡あ　芭蕉　蝸牛　鶯　鈴

廿あの名ある多数字本　又尾上　三日月のあ　二字三字舎ゝのあ

○一字二句のあ

柳　柳　菊　厂　蕊　雪　多ある　のあ　二季変ゝ感ある和ハ一あ

ゝて二用なわゝ　口季ゝ多ゝる句二句月ゝ季ゝとまりて八ゝ一ゝ

出魚馬車鍬酒飯茶の部　木魚　鈴清　なと名て三男もありめぐ〜

○一字三名の部

山雪　岩畑　滝沢　波　蓬　濤　亀の部　鶴の字

○れよ一つの部

世代　意　写て　民の字　西　さめとかろて言も　雲

○れよ二つの部

おろう能名

○ろ名よ一名の部

竜　鬼　虎の類。異名異体の部　鬼海　虎石　虎皆　なとこしたい五六名もありめぐ〜

○載笛の資名よ

も名部一つ中次　口伝

△格合資名ろめもの

出　書　船の部　形ろ名て格合名ろ　う誰の部　人海名

ろ合名ろ　口伝

みすて名貴の武なり　大船　筆　筆法　筆ろ　ろ名　扇乃名

仕ろ名ろ名も名化よろべし。光　時の洞名ろ名。貴人名位の法方　老幼

の問名あわい用格ろ字色の撰物ろ仕ろ法ろ名ろやうなんろ名と

先格の部あわい七名ろの部も名物ろ名ろ書班部わ名。れを部わ。

三名ろ名すべきろ名。さわい方貴ろ七名のあも京仕り格名仕ろハ三名ろ

許すべく。又一座に三四句の季。句あるべき句までかへりて一句二句
にもすべし是等にも此る理有て好句を害することなきまでと五番の
先老人に語りし事にて又古来より究竟の様子なりもゞかしとく
祖翁の正風をあゆみて俳諧に於て法式を増減するとなく大むね
此中なる所あるといへども今日の罪人となる事をまぬかれず然ば
の誹せ候してはとてもやすく捨りしめんとなり去来曰先師ハ俳諧の法式
を用ひてなを捨られ此に不ある附に古式を守り捨ることもおかざる
新に捨て穴まほし 中略 上より捨てる法式もあらしかるを人あらバ
是非捨益するも私なるべしと是を人にあきらかに解きてすまあらん

○又

野梅 秋去 | 川鵆 秋去 | 雨乞 秋去 | 掛乞 冬秋

此句ハ近代の新式なれバ一句離れてハ雑にもせよとある。
されバ四季とも三句去りにて滞なし

○春

鶴 | 雛 | 鸞 | 鴬 | 鵆 | 茅の巣 | 野梅

○夏

袷 | 単物 | 扇 | 団扇 | 汗 | 雲乞 | 清水 | 泉 己上者 夜秋 | 鴨 | 俵 | 盤 | 蛍 ／ 葉

○秋

灯籠 切所ハ 変し秋 | 鳥おどし | 鳥威 | 晒酒 | 掛乞

○冬

埋火 囲炉裏 居風呂 摺火 焼火 夜着 蒲団 踏皮
頭巾 綿ぼうし 紙衣 垢切 胼

此あハ冬なりとて季とせず。掛けるまで季となり雑となるの心也。
は季とする也。冬の季の許也。但かやうに季をとはれて按ず。
冬の風の暖なるをしるかんや。句によりて二句もすべきや

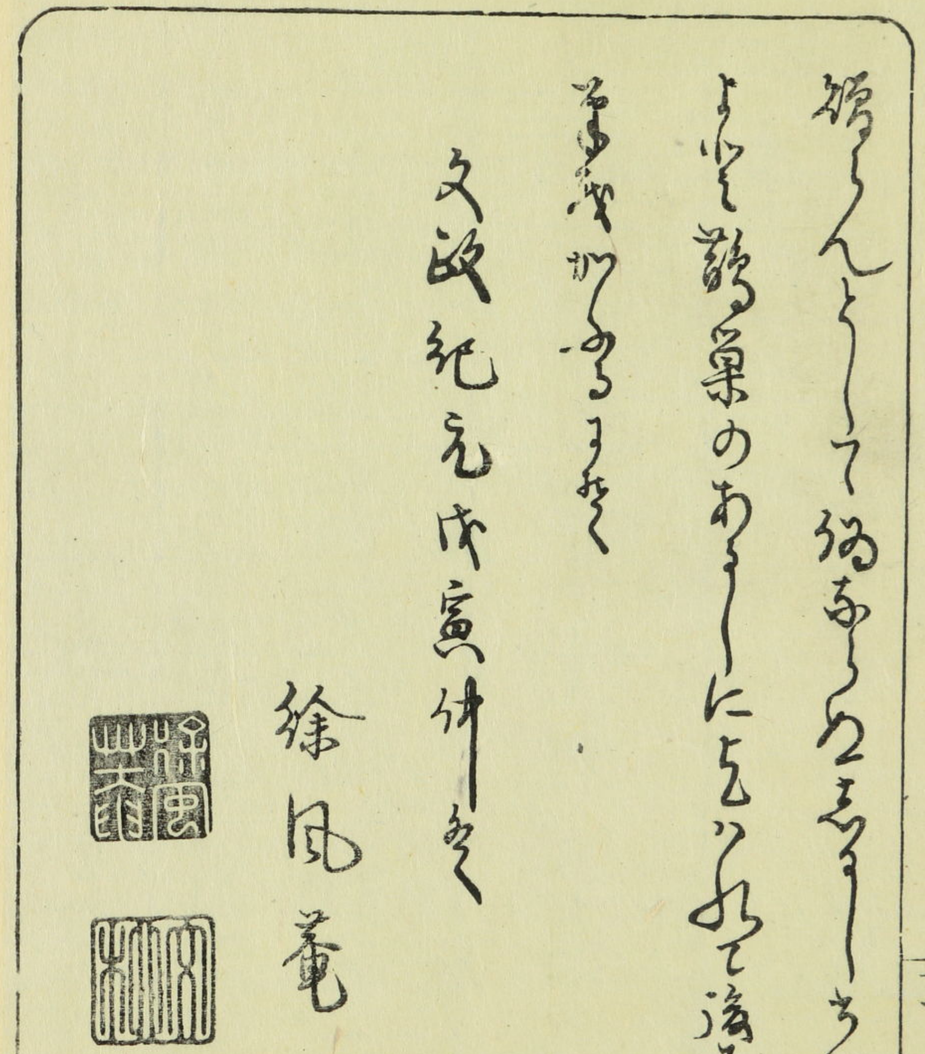
祭 鷹 袷 鰹 鮎 築 節季

此ハ二季三季にわたれば等作を雑とし古式になるひて。
一句を云まして八三句云ても許すべきや

此巻に口傳と書しるハ秘説にあれば筆者のつくしがたきなり

莽莽之話畢

三秋の門人まことにあまたありといへども撰る
わか季冊子ハ其句の尽くも冬の時雨を
ふ翁翁の定まる所ハ余と此下にて
其の世を先師此まへしさまに述て
目くまわる冬文目さへ新ふ付ふ先と
信し法式まれなきなれし この書ハ
雨風をも中法式の日本の人に



書林
京寺町二條
野田治兵衛

鶯巣著述目録

葬儀論　文墓礼法式正略式并撰題式正略式の類五条式注解并さゝ合きさゝもの事記

夜話類　連雀紀談の巻り和句の俳諧の話始末三字句の諧一巻の如く俳者の学問の類木人の夜話句を筆記く

藤のちり　て地人の三才より神祇教義の種々又和漢古人の辞をあつめて文をつゝり句をえらび材るり写本

園の小草　文章句作乃始末古人の規矩をひくあり引るる書の中寄題の一小冊子るり写本　お好漫々不出

老の曠　父俊文園学や園者馬指法示ちの古稀一の賀集

鳥の徒来　美濃尾張伊賀伊勢大和山城摂津播磨備前伊予阿波讃岐の俳集ちり合紀行入

七種供養　脇者二十三回忌追善集　両国者点指法国和句入

夜長の伽　茶話ゝ和るる古門人の河井尾言之集て一巻句の四時上文章者之者の助ちす

東京藏書